人口は増加中

昭和51年（10月1日現在）の茨城県の総人口は2,378,220人，世帯数602,414世帯で，昭和32年と比べて人口では323,655人（増加率15.8%），世帯数では214,892世帯（増加率55.5%）の増となっている。

人口が200万台になったのは，昭和22年であったが，昭和30年に入ってもその前後を停滞したままであった。増加のきざしがようやく見え始めたのは，昭和30年代の後半以後で，これは京浜地区からの工場の誘致や進出，鹿島工業地帯の開発，研究学園都市の建設等によったものであった。昭和44年にようやく210万台を突破した県人口は，その後順調に増え続け，昭和47年に220万台，昭和50年には230万台に達した。

特に鹿行，県南の両地域の増加はめざましい。鹿行地域は，昭和42年には人口増加率△0.0%で県内唯一のマイナスを示し，自然増加率0.8%，社会増加率△0.8%であったのに対し，昭和43年には人口増加率1.8%，自然増加率0.7%，そして社会増加率は1.1%と県内4地域で最高の人口増加率を示した。なかでも鹿島町で社会増加率が9.4%にも達したことが，鹿行地域の人口増をもたらした主要因であろうといわれ，鹿島開発の影響の強さを思わせるものであった。この影響によって，昭和43年～47年までの鹿行地域の人口増加率は，連続県内最高であり，しかも昭和45年の鹿島町では，人口増加率20.2%，社会増加率18.4%を記録している。しかし昭和47年は，県南地域の人口が増加を見せて，人口増加率2.1%で鹿行地域と同率首位を分けあった年でもあった。この年の社会増加率を比較すると，鹿行地域0.9%，県南地域1.0%で，県南が鹿行を上回っていた。この傾向は翌48年にはっきりと現われ，人口増加率は県南地域2.7%，鹿行地域2.4%で首位が入れ替ってしまったのである。そして昭和50年には人口増加率が2.1%（県南3.1%），社会増加率1.0%（県南2.2%）の鹿行地域が，51年には人口増加率1.0%（県南2.7%），社会増加率△0.1%（県南1.8%）と，県北地域と並んで県内最下位を示すほどの落ちこみを見せたのである。とりわけ鹿島町の社会増加率が，△1.3%（50年4.1%）と一挙にマイナスに転じている点が目立つ。これには，鹿島開発による人口流入が，事業の一応の終了により転出に転じたことと合せ，高度経済成長から安定成長へとなった経済事情などによるものと思われる。

県南地域の人口増加の要因としては，従来は取手市を中心としたベット・タウン化にあり，昭和44年には，取手市（当時は町制）は人口増加率19.9%，自然増加率1.7%，社会増加率18.2%という大きな伸びを示した。これは，日本住宅公団「井野団地」の入居が同年6月から8月にかけて行われ，約5,000人（2,200世帯）の転入があったことによる。しかし，この分を差引いた人口増加率の試算でも6.5%となり，昭和43年の6.2%，昭和45年の6.0%にほぼ匹敵している。

また，桜村では研究学園都市の建設に伴って，昭和46年に0.5%だった人口増加率（社会増加率△0.2%）が，昭和47年には6.1%（社会増加率5.8%）と大きく伸びている。また牛久町では団地の造成に伴って，7.0%（社会増加率5.6%）の伸びを示し，県内の市町村の首位にたった。昭和48年以降，県南地域の人口増加は著しく，それには昭和48年の人口増加率が，牛久町，千代田村，藤代町，桜村で，それぞれ8.6%，6.8%，5.5%，5.3%という高率を示していることが大きくひびいている。特に桜村が，昭和49年から昭和51年まで，それぞれ17.1%，14.5%，15.6%（社会増加率は16.4%，14.5%，14.4%）と3年連続県内のトップを占めており，研究学園都市に伴う人口増加の激しさを物語っているのが注目される。昭和51年中に社会増加が特に著しい6市町村のうち，5市町村が県南，1村が鹿行地域であるということが，県南地域の人口の急速な伸びを示している。全体としてみれば，県南地域の人口増加は，従来から東京の通勤圏としての機能によってなされてきていたのだが，交通事情の改善などに伴う通勤圏の拡大と，研究学園都市建設に伴う県外からの転入などによって，取手市，牛久町，茎崎村，藤代町，桜村等の社会増加が引き

おこされ，近年の伸びになってきたものと思われる。

なお，県北・県西地域とも人口増加率は年々増加を示しているが，県南・鹿行に比べてその増加率は½から⅓程度である。特に水戸市，勝田市は，人口増加数をみれば県内市町村のなかでもトップクラスにあり，人口増加率も２～４％程度であるが，県北山間部の過疎化が進んでいる地域が常にマイナスであるため，県北全体の人口増化率はそれほど大きくなっていないということに注意する必要がある。県西地域では，結城市は順調に人口が増加している。古河市でも人口増加率はプラスを示しているが，それは社会増加率のマイナスを自然増加率が補っているからで，そのパターンとしては県北に多く見られる過疎市町村に類似している点に特徴がある。

県全体の人口は，今後も順調に増加していくことが予想されるが，一方で県北山間部と県南・鹿行地域との格差の拡大が一層問題になってくると思われる。

年次	世帯数	人口（10月1日）			性比（A/B×100）（女100に対する男）	人口密度	人口移動	
		総数	男（A）	女（B）			自然増加	社会増加
昭和32年	387,522	2,054,565	1,000,889	1,053,676	95.0	338.0	—	—
33	390,438	2,050,881	998,941	1,051,940	95.0	337.4	—	—
34	399,057	2,046,733	996,201	1,050,532	94.8	336.7	—	—
35	409,465	2,047,024	1,000,184	1,046,840	95.5	336.2	—	—
36	411,416	2,055,254	1,006,720	1,048,534	96.0	337.6	15,608	△ 5,729
37	413,442	2,062,849	1,012,735	1,050,114	96.4	338.8	15,561	△ 9,911
38	415,939	2,064,914	1,013,535	1,051,379	96.4	339.2	16,747	△12,910
39	419,903	2,076,621	1,020,297	1,056,324	96.6	341.1	17,076	△ 9,369
40	447,871	2,056,154	1,007,852	1,048,302	96.1	337.7	17,914	△10,153
41	453,110	2,056,637	1,008,221	1,048,416	96.2	337.8	9,716	△10,490
42	460,405	2,071,277	1,016,757	1,054,520	96.4	340.2	20,887	△ 3,437
43	469,900	2,084,963	1,024,153	1,060,810	96.5	342.5	18,136	169
44	486,782	2,118,391	1,042,441	1,075,950	96.9	348.0	18,580	15,501
45	508,537	2,143,551	1,054,003	1,089,548	96.7	352.1	21,014	16,399
46	525,585	2,180,835	1,075,077	1,105,758	97.2	358.3	23,417	10,801
47	537,960	2,210,636	1,090,757	1,119,879	97.4	363.2	24,947	4,885
48	551,436	2,250,374	1,111,710	1,138,664	97.6	369.7	25,271	16,062
49	568,243	2,294,443	1,135,458	1,158,985	98.0	376.9	25,632	19,220
50	590,458	2,342,173	1,159,772	1,182,401	98.1	384.6	23,386	15,550
51	602,414	2,378,220	1,178,688	1,199,532	98.3	390.5	22,713	12,661

資料　統計課「人口と世帯年報」・「常住人口調査結果表」

注）１．人口密度算出の面積データは，昭和32年～34年は6,078.30km²，35～39年は6,087.92km²，40～44年は6,088.01km²，45～49年は6,087.20km²，50～51年は6,089.59km²である。

２．世帯数・人口は各年の10月１日現在，人口移動は各年次の累計（１～12月）である。

（県統計課　企画調整係　伊藤）

常　　識

「常識」なることばを辞書で調べれば，「健全な社会人が，共通に持つ，普通の観念」とある。この「健全な社会人」なることばが，実は曲者である。何をもって，「健全」とするのか。私などは，毎日の生活が飲んだくれの生活であるから，「不健全」ということになる。すなわち，私の持つ普通の観念とは，さしずめ「非常識」であろうか。冗談はさて置いて，「常識」度のテストを一つしてみよう。

昔々，ある所に１人の羊飼がおりました。その羊飼は死ぬ前に，３人の息子たちに遺言を残しました。それは，後に残った41頭の羊を，長男は½，次男は⅓，三男は⅐ずつ分配するように，というものでした。ところが，「常識」では，41頭の羊は½にも⅓にも，まして⅐にもできません。困りきった３人の所に，近所の老人がやってきました。そして，連れてきた１頭の羊を41頭の羊に加えて42頭にすると，長男には½の21頭，次男には⅓の14頭，三男には⅐の６頭を分けてやりました。

21頭＋14頭＋６頭＝41頭

ですので，残った１頭の羊を連れて，老人は帰って行きました。

やがて，長男は21頭の羊を元手に働いて，３人の息子をもうけました。ところが，長男は流行の病でポックリ亡くなってしまったのです。後には，彼の父が残してくれたのと同じ41頭の羊と３人の息子が残されました。遺言によると，41頭の羊は，３人の息子たちに，それぞれ½，⅓，⅙ずつ分配するようにと指示されてあります。しかし，今度の場合も分けることができません。そこで次男は，自分たちの時を思い出して，１頭の羊を連れて３人の息子たちの所に行きました。そして42頭にすると，それぞれに，21頭，14頭，７頭ずつに分けました。ところが，

21頭＋14頭＋７頭＝42頭

ですので，次男の連れていった羊は戻ってきませんでした。

どうもこの話は，いわゆる「常識」で考えては理解しにくいようである。数学（算数？）の素養があれば，説明のつく問題なのだが，案外数学嫌いの多い世の中のことゆえ，混乱する人もあることだろう。すなわち，「常識」という奴は，どうも各人の素養＝各人の基礎となっている知識の集積によって左右されるらしい。数学的素養の有無が，この場合「常識」の有無のキー・ポイントになっている。私たちの社会と未開の社会，欧米と日本，アジアと日本，ひいては各県同士にも，この「常識」となる事象の差異はあるようである。「常識」とは，必ずしも万人に共通ではない，ということが「常識」といえようか。

統計にたずさわる私たちも，統計について知っている人と，いない人の間では，この統計についての「常識」が違うということを忘れてはいけない。まして，調査をする時，調査を依頼する時，私たちにとっての「常識」に従って話を進めては，意外なところに盲点が生じて，後々大きな誤りを引起す原因ともなりかねない。注意して，しすぎることはあるまい。

（伊藤）

喫茶店が
日本一多い県は

喫茶店の最も多い都府県はどこでしょう。こんなクイズまがいのデータを通産省の商業統計からハジキだしてみると……。

むろん店数そのものでは，東京，大阪，愛知と人口に比例した順番になるが，喫茶店1店当たりの人口，つまり，人口割でみた喫茶店の分布は，最も過密なのが大阪で人口599人に1店，次いで高知(624人)，愛知(708人)，兵庫，東京，京都と続く。

逆に，最も少ないのは熊本で 3,905人に1店，次いで鹿児島(3,695人)，埼玉(3,423人)あと山形，秋田，佐賀……。

ちなみに，本県の喫茶店数は 928店。1店当たり人口は2,543人，全国の店数は85,911店，1店当たり人口は1,275人。

このへんでお茶でも——。がその一杯も最近はあまり気軽に味わえなくなってきた。もともとジワジワ値上りしていたところへコーヒー豆の霜害という強烈パンチが重なり，引きずられるように飲み物全般が上げ足加速，「息抜きの一杯」と呼ぶには，苦味，渋さがぐんと濃くなりそう。

コーヒー豆高騰のきっかけは，世界の生産量の3分の1を占めるといわれるブラジルでの霜害。

コーヒー豆は，日本の小豆と同じような相場商品。1昨年夏の霜害以来，値上りを見込んで相場は，いまも急上昇という。

コーヒー豆が日本の港に着いた時の価格は，1キロ当たり 1,700円ほどで，霜害前に比べてざっと4倍にもはね上がっているという。

家庭で飲むレギュラーコーヒーは，すでに3回ほどのアップで霜害前に比べ約2倍に値上り。

インスタントコーヒーも，メーカーが昨秋2回目の値上げを発表。小売価格は在庫品もあってまたバラつきがあるが，100グラムびんで700～750円。

一杯に換算すると17～18円。

ちなみに，紅茶は，ティーバックで1人前10円，かん入りで6～7円。ココアは，1杯当たり24～25円。日本茶は1人1回分3グラムとすると15円につく。

（上沢）